

2025 年度 第 21 期
小児在宅ケアコーディネーター研修修了生の学び

- 退院指導を進めている時、家族の意向を確認していたつもりでいたが医療ケアができなければ帰れないと私たちが主導権を持ち進めていたことに気がついた。
- 在宅で過ごすためには何が必要なのか家族と一緒に考え進めていく、家族主体の看護ができるようにしたいと思った。
- 私達医療者が主導でなく、家族や子供が中心の関わりが大切である
- グループワークを通して、病院でも在宅でも、家族への関わりは難しいことを再認識した。特に、子供の病気の受け入れの過程は、家族の思いの揺れに寄り添い、受容していく経過を見守ることが重要だと感じました。
- 理解してはいるけど納得していないという状況が実は多く、その後の子供の受け入れにも影響していくことも知った。
- 受け入れができていないまま在宅生活が始まることもある中で、その思いも含めて看看連携、他職種連携でフォローしていく必要があることを学んだ。
- 多職種連携や情報共有の重要性は分かっているつもりではあったがその難しさも学んだ。その中でも児と家族の最善を考え適切な対応と調整していくスキルを身につけて行く必要があると感じた。
- こどもや家族に寄り添うことの難しさを学びました。答えはひとつだけではなく、はつきりとした正解もない中で、考え続けることが大切だと学ぶことができました。
- 講義やグループワークから、自分は看護師としての考えを優先して、家族と会話していたと気づいた。
- こどもと家族のことを考えているつもりだったが、まだまだ未熟だったと、痛感した。
- 家族や子供の発言や行動で、なんでかなあ？と感じたときこそ、対象者の思いを聴けるような、看護師でありたいと思った。
- 医療的ケア児の家族や患者さんに対して、私たちが出来ること、家族としてどうありたいか、考える機会となりました。
- 患児の思いを尊重すること、家族の思いを知ること、医療者の思いを押しつけないことの重要性を学んだ。
- 退院後の様子を知ることが出来るように、地域との多職種連携をおこなえるとよい。
- こどもと家族を支えること、今までしてきたつもりではあっても実は医療者目線になっていた部分があったかもしれないと感じた。
- 実践の中でもこどもが家族に寄り添い、その人らしく過ごしていけるような支援をしていきたいと思いました。
- 在宅ケアは子ども・家族が主体であること、日々の生活で気持ちが揺らぎやすいが、些細なサインを見逃さずにキャッチする力が医療者には必要である。子ども・家族の幸せ

は何だろうと悩みながらも、その実現のためには様々な職種、施設の協力が必要であり、連携しなければならないが、現実はその連携も難しい。でも諦めずに少しでも前に進めるように行動して行くことが大切である。

- 患者、家族が主体であること、対話を大切にして決めつけの姿勢で関わらないように気をつけることを学んだ
- 子どもたちに対する看護師としての姿勢が間違っていた事に気が付いた。
- 今まで、患児家族のためにと思い実施していた看護の主体が、看護師の目線で話していた事に気づくことができました。
- 退院に向けた技術指導ばかりに目を向けるのではなく、患児を 1 人の人間としての考えや思いを知る事、家族の考えや思いを知ることが大切であることを学んだ。
- 話し方一つを取っても「子どもが楽になるからするよ」とか、一緒に成長を喜ぶことや「こういうことが好きだね」など子どもを通した対話ができているだろうか日々の自分の看護師としてのあり方を振り替える機会になった。
- 講義の中で「聞きたくないから聞かない」と選択をしたことも意志決定なのだと言うことから、主体である子どもも親御さんと同じく治療方針を聞くことを当たり前と考え、聞きたくない選択肢を与えられていなかったことに気づいた。
- コーディネーターの役割として、多職種、関係機関を繋ぐことだけでなく、患児家族の思いを繋ぐ役割が重要なのではないかと感じた。
- 子どもにとって何が 1 番良いことかを考えること、子どもが自分でいられる時間を支えるために技術を持つことが大切である。
- 親や子どもがどのように感じているかを共有し一緒に支えていくために、子どもと家族のためにできることを諦めないことが大切である。
- 在宅支援をする時は手技獲得やサービスの調整の事で頭が一杯いっぱいになってしまっていたが、患児本人や家族の思いを第一に考え、支援する事こそが患者や家族の求めている事になると学びました。
- 思いの傾聴、寄り添う、観察するという今までよく言葉にしていたことについて、日々の看護に活かせるヒントを具体的にいただくことできた。
- 患者さんがお話しやすい雰囲気、普段の様子やささいな普段との違いを観察し、見逃さないこと、患者さんの様子をご家族と共有する中で、患者さんと信頼関係を気づいていくことが大切。
- 患者さんやそのご家族が中心であることをぶれずに考え、患者さんやご家族それぞれが、どのように生きていきたいかと共有することが大切であることを学んだ。
- 医療的ケア児の手技獲得に力を注ぎがちになりますが、今回の研修で、こども、家族主体で考えること、成長発達に合わせてどうありたいかを考えること、寄り添い対話することの大切さを学びました。
- 医療者へこんな事を言っているのだろうかと思慮家族の気持ちも踏まえて、他施設と

調整されている訪問看護の方々など、地域でも頑張ってみえる方を知り、同じ看護師として、とても励みになった。

- 子どもとその家族をケアする姿勢、考えかたなど様々な領域で働く人たちと意見交換することで学びが深まった。
- その人らしさを支えることの難しさ、重要性、その人らしさとはどういうことなのかを深く考えるきっかけをもらった。
- こどもはもちろん親も一人一人、人として大事にしていくことを大事にして行きたいと感じた。
- こちらの姿勢や関わり方、知識で視野が広がると思いました。
- 学ぶこと、様々な人の考えや意見、思いを聞くことは重要だと感じました。
- 家族、子どもに寄り添うこと、話を沢山聞くこと、小さな変化に気づくことが大切であることを学んだ。